

アイヌの伝統的生活空間の再生事業
の中期的展開方針に関する報告書

平成19年7月

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
アイヌの伝統的生活空間の再生事業検討会議

目 次

はじめに

第一章 アイヌの伝統的生活空間のネットワークの形成

- 1 アイヌの伝統的生活空間の再生に関する実施要領に定める地域設定にあたっての検討事項
- 2 先行実施地域の実施状況
 - (1) 検討の考え方
 - (2) 検証及び評価の方法等
 - (3) 検証結果
 - (4) 評価
- 3 アイヌの人々の意向
 - (1) 社団法人北海道ウタリ協会からの提言
 - (2) 平取地域アイヌ文化伝承活動実践団体関係者の意見
- 4 ネットワークのあり方について
 - (1) 自然素材の種類等
 - (2) 地域の特性
 - (3) 機能の分担・連携
- 5 平取地域におけるイオル再生事業の実施について
 - (1) 先行実施地域における実施状況から
 - (2) アイヌの人々の意向
 - (3) ネットワークのあり方

第二章 ネットワークの検討結果を踏まえた今後の事業展開

- 1 各イオルの目指す姿
 - (1) 白老イオル
 - (2) 平取イオル
- 2 事業の推進体制
- 3 事業の展開
 - (1) 事業期間
 - (2) 主な事業の概要
 - (3) 事業の実施スケジュール
- 4 イオル再生事業実施要望地域に対する対応についての考え方
 - (1) 情報の提供等
 - (2) 自然素材の供給
 - (3) 他地域からの事業への参画
 - (4) 弾力的対応
- 5 事業の検証と評価

はじめに

平成8年4月のウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会の4つの新しい施策の提言のうち、「アイヌの伝統的生活空間の再生」については、提言から10年の時を経て、平成18年度から白老地域において先行的な取り組みに着手した。

当財団としては、アイヌに関する総合的な研究やアイヌ文化の振興、アイヌとその文化の理解の促進の取り組みを行ってきており、一定の成果を上げているものと考えているが、アイヌ文化の伝承者の高齢化、核家族化、若年アイヌの都市部への移動など社会経済構造の変化により、アイヌ文化は喪失の危機に直面している。

このような状況のなかで、実践的な活動を通してアイヌ文化を継承しアイデンティティを共有できる場を保証する、アイヌの伝統的生活空間の担う役割は重要性を増している。

また、社団法人北海道ウタリ協会においても、アイヌ文化の喪失は民族のアイデンティティの喪失に繋がるとの認識から、アイヌの伝統的生活空間の再生の早期実現と充実を渴望しており、本年3月に白老地域について平取地域においても再生の取り組みに早期に着手するよう、提言がなされたところである。

当財団としては、これらの状況を踏まえ、アイヌの伝統的生活空間の再生事業をより効果的かつ効率的に実施する必要があるとの観点から、学識経験者と伝承活動実践者からなる「アイヌの伝統的生活空間の再生事業検討会議」を設置し、

- 白老地域における事業の実施状況
- アイヌの人々の意向
- 白老地域及び平取地域の自然素材及び地域の特性

上記3項目を踏まえ、次の事項について検討を行った。

- 平取地域における事業着手の可否
- 白老地域と平取地域における取り組み（ネットワーク）のあり方

また、この結果を基に地元関係機関の意向を踏まえ、今後の事業展開のあり方について取りまとめを行った。

本報告書は、上記内容について報告するものである。

第一章 アイヌの伝統的生活空間のネットワークの形成

1 アイヌの伝統的生活空間の再生に関する実施要領に定める地域設定にあたっての検討事項

平成18年4月にアイヌ文化振興等施策推進会議（国土交通省北海道局、文化庁、北海道、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、社団法人北海道ウタリ協会で構成）が策定した「アイヌの伝統的生活空間の再生に関する実施要領」において、先行して事業を実施する地域（白老地域）以外の地域の設定については次の項目を踏まえ、同推進会議が、学識経験者、アイヌ文化伝承活動実践者等の意見を聴き、定めることされている。

このため、アイヌの伝統的生活空間の再生事業検討会議において、この項目について検討を行った。

- (1) 先行実施地域の実施状況
- (2) アイヌの人々の意向
- (3) ネットワークのあり方
 - ①自然素材の種類等
 - ②地域の特性
 - ③機能の分担・連携

資料1 アイヌの伝統的生活空間の再生に関する実施要領に定める地域設定にあたっての検討事項

アイヌの伝統的生活空間の再生に関する実施要領（抜粋）

2. 地域におけるアイヌの伝統的生活空間の再生に関する基本的事項（5～6ページ）

(2) 地域の設定

アイヌの伝統的生活空間の再生を進めることとされる地域の設定については、アイヌ文化振興等施策推進会議が、①先行実施地域における実施状況等も踏まえ、学識経験者、アイヌ文化伝承活動実践者等の意見を聴き、定めるものとする。

なお、地域の設定に当たっては、それぞれの地域の事情を踏まえ、②アイヌの人々の自主性が尊重され、その意向が反映されたものとなるよう配慮する。

当面は、地域の環境・条件やアイヌの人々の意向等を踏まえて、先行して進めることとされた白老地域において、空間の形成及び運営管理等を重点的に行うこととし、③空間全体のネットワークとしてのあり方についての整理の結果等を踏まえ、地域の設定を行うものとする。

なお、地域の設定に当たっては、それぞれの空間がネットワークを形成し、それらの空間以外の地域も合わせて、全体として効果的に機能を発揮できるよう、③自然素材の種類等や地域の特性などに応じて、機能の分担や連携を図る。

2 先行実施地域の実施状況

(1) 検討の考え方

実施要領において、当財団は、効果的な施策の展開を図る観点から、事業年度毎に、イオル再生事業の実施状況について検証を行うとともに、事業期間を通じ地域における事業の実施状況等を勘案して評価を行い、推進会議に報告することとされている。

このため、白老地域における実施状況等を踏まえた地域設定等の検討については、この検証と評価を以て行った。

(2) 検証及び評価の方法等

平成18年度イオル事業について、資料2のとおり検証と評価を行った。

(3) 検証結果

事業初年度であったが、概ね当初計画どおりの成果を得ており、事業実施上で明らかとなった課題についても、関係機関が協議の上、改善方策を立案し平成19年度事業計画に盛り込んでいる。

また、直接的な事業効果の外に、事業を通して、アイヌの人々が抱える伝承者の問題等に対し、積極的にイオルを活用しようとする等、アイヌ文化に対する意識が醸成されてきている。

さらに、アイヌの人々以外についてもイオル事業がマスメディア等に取り上げられることにより、アイヌ文化に対する意識、認識が深まっている。

(4) 評価

平成18年度事業については、上記のとおり概ね計画どおりの成果を得ているが、将来的な目指す姿に対しては、事業の根幹をなす空間の形成について、現状の事業展開では、アイヌ文化のシンボルとしての壮大なイオルの森の形成についての課題が明らかになっている。

また、アイヌの人々が行う様々な活動に対する、自然素材の安定的な確保についても短中期的には十分であるとは言えない。

このため、現行の植栽地については、適切な維持管理を行い、将来にわたりアイヌ文化を伝える自然素材の採取の場として育てて行くこととし、アイヌ文化が置かれている現状に鑑みアイヌ文化を育んだ壮大なイオルの森の形成について検討を行う必要がある。

資料2 白老地域におけるイオル再生事業の検証と評価

1 検証・評価の視点

検証(短期的)	当該年度実施計画に定める推進体制、各事業の成果(結果)及び実施方法等について、事業の効果・課題等を整理し、事業目的の達成の適否等の検証を行い、改善を要するものについてはその方策を策定する。
評価(長期的)	実施要領に定める基本的事項のうち評価が必要な事項、及び空間の形成等の各事業の柱について、短期的検証結果を踏まえ、将来的な実施要領に定める目指す姿を指標とした評価を行う。 ただし、今回については、イオル再生事業が空間の形成に時間を要することなど、短期間で事業成果を求めることが困難であることから、評価項目の一部のみを対象とした限定的な評価とする。

2 検証評価の項目

検 証	事 業 の 内 容	評 価
推 進 体 制	イオル事業実施に係る関係機関の役割分担等	推 進 体 制
植 栽	イオルの森を形成するための植栽	空 間 の 形 成
試 験 栽 培	自然素材の育成及び育成手法の確立	
採取等の空間設定	自然素材を採取又は採捕できる空間の設定	
調 査 検 討	土地利用や設備・施設等に関する調査検討	
伝 承 活 動	イオルの森を活用した実践的な伝承活動	空 間 の 活 用
体 験 交 流 事 業	イオルの森を活用したアイヌ文化の体験交流	
空間の管理運営	アイヌの人々が中心となった管理運営体制の確立	空間の管理運営
ネットワーク	複数のイオルのネットワークのあり方の検討	そ の 他 の 事 項
規制緩和等	空間の活用及び活動にあたり必要な措置の検討	
財団事業の活用	財団既存事業の活用による効果的な推進	

3 検証・評価の結果

検 証	平成18年度イオル事業については、事業開始初年度であり、自然を基本とする空間を形成するという基本的な機能の確保を優先し、活用及び管理の対象となる空間が形成途上にあつたことから、これらに関連する事業を後年次の実施とした外は、概ね計画どおり実施されている。 ただし、実施に際しては関係機関の共通認識が十分に形成されていなかったなど、多くの課題が明らかになったが、これらについては関係機関が協議の上改善方策を策定し、平成19年度実施計画において措置を講じている。
評 価	評価項目のうち「空間の活用」については、アイヌ文化伝承の森づくりの第1歩としてマスメディアで大きく取り上げられた森野の苗畑地区をはじめとする植栽空間を舞台に、ポロト湖や海岸線などの水辺環境を活かしつつ、アイヌ文化伝承や体験交流等の取り組みを進めていこうとする気運が地元関係者の中で醸成されつつある。 一方、「空間の形成」については、海岸線と国立公園に挟まれ活用可能な空間が点在せざるを得ないことから、短・中期的には、即時利用可能な自然素材採取において難しい面があり、また、イオルの森のスケールの確保を図る点においても難しさがあるところ。

3 アイヌの人々の意向

(1) 社団法人北海道ウタリ協会からの提言

イオルの森を舞台とした活動の主体となるアイヌの人々で構成される北海道ウタリ協会は、古老伝承者が減少している今日、アイヌ文化の特徴的な世界観や精神世界を理解するために、自然空間における総合的な体験学習やその実践検証など、文化の追体験とそれから派生する文化の創造的活動がアイヌ文化の真の伝承のあり方であるとしている。

このため、同協会自らもイオルの活用主体となる立場から、イオル設置を希望する7地域の支部及び関係市町参加の「イオル推進委員会」を設置し様々な検討を行っており、その検討結果については、貴重な提言として受け止めているところである。

平成18年度については3回のイオル推進委員会が開催されており、平成19年2月23日に開催された同委員会において、地域のおかれていた諸条件を考慮し、白老地域に次ぐ事業の実施予定地として満場一致で平取地域を選定し、同年2月26日に開催された諮問委員会で平取地域における早急な事業実施の提言がなされたところである。

なお、ウタリ協会の提言の詳細については、資料3のとおり。

(2) 平取地域アイヌ文化伝承活動実践団体関係者の意見

平成19年5月9日、平取町の二風谷生活館においてアイヌの伝統的生活空間の再生事業検討会議を開催し、地元アイヌ文化伝承活動実践団体の代表者から意見聴取を行っている。

その結果、活動の継続のためには、一定のルールの下、自然素材を持続して採取できる空間を確保するとともに併せて人材を育成し継承環境を整えることが重要という意見が多く出された。

4 ネットワークのあり方について

(1) 自然素材の種類等

白老地域及び平取地域の植生の状況について、「平成16年度イオル再生等アイヌ文化伝承方策基礎調査報告書」を基に資料4のとおり取りまとめた。

いずれの地域も太平洋沿岸の山地帯から連なる地域であること、ほぼ同一の緯度に位置することなどから、陸域の植生については大きな違いが見られない。

しかしながら、白老地域については海岸線を有しており、海浜地植生や海産物を自然素材として有することが、平取地域との大きな相違となっている。

また、自然素材ではないが、平取地域は日高山脈の支脈が展開し沙流川流域には特徴のある地形が点在している。

資料4 自然素材の種類等

白老地域	<p>白老の主要な植生は、山地広葉樹林である。丘陵地にはクリやミズナラを主体とする広葉樹林があり、山地にはエゾイタヤやシナノキ等多数の広葉樹で構成される広葉樹林がある。</p> <p>山地広葉樹林に次いで多いのが、若齢常緑針葉樹林である。植栽列の間に広葉樹林が侵入している。侵入している主な広葉樹はダケカンバである。</p> <p>湖面に続く過湿な平坦地には高さのそろったハンノキーヤチダモ群落、丘陵の適潤な谷間にはハルニレーヤチダモ群落が分布する。その他、沢沿いにカツラやハルニレ、ヤチダモ、ヤナギ類などが生育している。</p>
平取地域	<p>平取の主要な植生は、山地広葉樹林である。ミズナラ、コナラ、エゾイタヤを主体とした林が多い。</p> <p>山地広葉樹林について多いのが、針広混交林である。トドマツ主体の林に、エゾイタヤ等の広葉樹が混交する。</p> <p>川沿いの沖積地で急斜面をなすところではハルニレ林が成立する。ヤチダモが混成し、ハルニレーヤチダモ林となることもある。沢沿いの山地斜面が崩れた崩積土には、カツラ林が成立する。細かく沢が入り込む地形が多くみられ溪畔林が発達している。</p>

(2) 地域の特性

白老地域及び平取地域の特性、アイヌ文化、地域の課題を資料5-1及び2のとおり、両地域の基礎的なデータを資料5-3のとおり取りまとめた。

両地域は、海の文化と山の文化の違いに留まらず、和人の流入などの歴史的要因や社会経済情勢など様々な要因により、伝承・保存されているアイヌ文化について、伝承の形態、伝承の主体、伝承されている内容など、異なる面がある。

イオルの再生にあたっては、地域の地形や自然環境のみならず、その地域の歴史や周辺地域の核として置かれている面も十分に理解した上で推進する必要がある。

(3) 機能の分担、連携

① 機能の分担

上記(2)で述べたように、白老地域と平取地域は、地域が伝承・保存するアイヌ文化がそれぞれ特徴ある様相を示している。

こうした文化的様相の異なる地域は、自然に根ざし地域毎に多様なアイヌ文化として、その地域自体が地域毎に異なる育みの中で後世に文化を継承する機能を担うものである。

② 連携

地域間の連携については、地域がそれぞれに担う機能を発揮し、相互に地域のアイヌ文化を補完しあい、北海道地域におけるアイヌ文化の振興等を図る間接的な連携と、各地域における各種取り組みにおいて、アイヌ文化に関する知識や経験の共有、自然素材の融通、人材の交流等の直接的な連携があり、これらを通じ、それぞれの地域及び周辺地域の抱える課題の解決や一層の取り組みの充実を図ることが可能となる。

このため、各地域の空間形成に向けた取り組みとは別に、上記のような連携を促進するための事業を実施する必要がある。

5 平取地域におけるイオル再生事業の実施について

実施要領に定める3項目について検討を行った結果、平取地域における事業の実施により、アイヌの人々の抱える課題の解決に向けての各地域の取り組みについても相乗効果を上げることが期待でき、アイヌ文化の振興等に大きく寄与することから、早期に事業を実施すべきである。

各項目の検討結果については、次のとおり。

(1) 先行実施地域における実施状況から

① 壮大なイオルの森の確保

イオルの森には、アイヌ文化のシンボルとしての空間の広がりが求められているが、白老地域については空間が点在していることから、その形成に課題を有している。

このため、平取地域においても事業に着手し、沙流川流域に広がる森林の中で広範なイオルの森を設定することにより、トータルとしてのイオルの森の形成に資することが可能となる。

② 自然素材の継続的な確保

白老地域の植栽物の育成には多大な時間を要し、また、早急に自然素材を採取するという面でも、多くのアイヌの人々が伝承活動等を行うことへの対応には十分であるとは言えない。

このため、自然素材が豊富に自生し現存する平取地域において事業に着手し、利用にあたっての調査や河川や川筋の森林を有効活用するための整備を行うことにより、自然素材の即時利用と持続的な確保が可能となる。

(2) アイヌの人々の意向

社団法人北海道ウタリ協会では、アイヌ文化伝承者の高齢化と減少が進んでいることなどから、後継伝承者の育成が喫緊の課題であるとし、文化伝承の基盤として、また、アイヌ文化の総合的な実践の場としてイオル再生事業に期待を寄せている。白老地域に続く適地として平取地域を選定し、両地域でイオル再生事業を進め、ネットワークの構築と相互補完による伝承環境の充実、さらに複数の地域における伝承活動の場の整備について要請が出されている。

また、平取地域はアイヌ人口の多い日高支庁管内に位置し、白老地域が位置する胆振支庁管内と合わせると、全道のアイヌ人口の約6割を占める地域において事業を実施することとなる。

平取地域は暮らしに根ざしたアイヌ文化の伝承者が多数居住し伝承活動が活発に進められていることもあり、当該地域での事業実施は、北海道全体のアイヌ文化の伝承・保存に大きく寄与し、文化の振興等を推進することとなる。

(3) ネットワークのあり方

文化的様相の異なる白老と平取の両地域は、自然に根ざし地域ごとに様相の異なる多様なアイヌ文化の一翼を担うものであり、それぞれの地域においてしっかりとイオルの再生事業を行い、地域の文化を保存・伝承し後世に繋いで行く必要がある。

また、両地域の地勢や歴史的要因等の差により、イオルの特性も異なることから、この差異を踏まえ適切に機能分担を行った上で、自然素材や人材等についての連携を促進することにより、両地域が相互に補完し合い、取り組みの相乗的な効果が期待できる。

さらに、この取り組みを確実に推進することにより、周辺地域を含めたアイヌ文化の伝承・保存の核として、各種課題の解決や取り組みの更なる充実を図ることが可能となり、今後のアイヌ文化の振興等の一層の充実が期待できる。

イオル事業に関する意向について

(社) 北海道ウタリ協会

【最近の協議・検討について】

北海道ウタリ協会は、イオル設置を希望する7地域の支部及び関係市町の関係者による唯一の意見交換の場である「イオル推進委員会」(H18は3回)を開催し、アイヌの伝統的生活空間の再生事業(以下「イオル事業」)におけるアイヌ民族の文化活動の基盤となる「イオルのあり方」や「ネットワークのあり方」などについて協議、検討を重ねてきました。特に、イオルの事業内容や活用及び管理の基本的な考え方については、「アイヌ文化振興財団」並びに国、道、関係市・町の支援、関与が必要ではあるものの、具体の事業企画や実施については、アイヌ民族の意向が十分に反映され、その意向に沿った事業推進の主体となり、できるだけ大きなイニシアティブを確保することが重要であると「イオル推進委員会」で確認されています。

そのためには、各々のイオル候補地域や要望内容を相互に把握することが必要であるとして、委員会を現地視察もかねて周り順に開催(白老、平取、釧路の3カ所を実施済み)、さらには、道民啓発のために開催した「イオルフォーラム」においても同様に候補地域に入り、巡検などを実施してきました(札幌、旭川、十勝、釧路の4カ所実施)。

また、イオル事業の推進は、すでに取り組みられている<各地の古老伝承者が少なくなってきたことから既存の事業推進もより効果的に実施することには変わりはないが>財団の文化振興事業<屋内の教室や講座で行われているいわゆる座学>とは明らかに性格の異なる<総合的な体験学習やその実践の検証、聞き取りなどの発展学習を導くための必須の>文化伝承施策であると捉えています。

【イオル設置の意義とネットワーク化について】

すなわち自然空間(海・川・山・湖沼)に分け入り、四季を通して直かに素材や資源との接触でしか習得できない文化の追体験こそが、狩猟漁労、採集文化であるアイヌ文化の原型<広義の文化実践>であり、その再現が総体的な追体験を可能にするからです。

また、アイヌ文化が特徴的に保持している世界観や精神世界を理解するにはイオル事業の確立が欠かせません。

さらには、近現代における同化政策<土地・資源、文化の享有などに関する法規制など>によりアイヌ民族が失ってきた文化の再生や素材の供給の場に留まらず、民族的アイデンティティにつながる回帰体験、威厳や自信の回復につながるパフォーマンスの場、国民に対する啓発、さらには教育に寄与する場にしたいと考えています。

この様な考えに基づいて考えられるべきイオル事業について、地域間相互の「ネットワークのあり方」は、7地域に限らず、最終的には全道各地に住むアイヌ民族にとっても機能していくべきことを前提とし、かつ多くの先住民族が保持してきた狩猟採集文化の特性から、文化的な地域差がその地勢や風土の差異と不離密接に関わっていることを強く認識してもらい、アイヌ文化の真の実践、伝承が可能となる母なる大地の代替ともいうべきイオル事業として、より一層の拡充並びに設置希望箇所の追加、完全実施を速やかに図るべきとしております。

【第二候補地の選定について】

当面、白老に続く次の候補地選定については、入手困難となった素材の＜継続的な確保の一方策として＞植栽を柱にし、漁猟・採集文化の実践も可能な「海」を中心とした白老の先行実施を補完するものとして、「山」の狩猟・採集文化の再生構想が期待される沙流川流域、平取が候補地として望ましいとされました。

特に、平取地域は、アイヌ文化を体得している古老の減少が加速しているなかで次世代や若い世代の文化活動が比較的活発であること、文化再生に必須の森林や古くはアイヌ民族に活用された自然領域が豊富であること、さらには古来からの伝承が根付く地名やアイヌの遺跡が広大な地域に連続し、かつ河川に沿いながら生活領域に接近して存在すること＜国の重要文化的景観の選定答申中＞などの理由があげられました。

なお、アイヌ民族が多く居住している日高、胆振の優先度、文化活動の実績やイオル設置体制の準備が比較的進んでいることなどにも触れられ、満場一致で平取地域が次の候補地として決定されました。

その上で、アイヌ文化の真の文化伝承の実践が可能となるよう一日でも早く狩猟漁労・採集の場の確保やアイヌ文化の再生全般にわたる諸様相の実践が図られて、文化の全体像を結ぶような方向性をもって、白老・平取地域を強力に連結させて推進すべきとの意見が示されました。

【今後の事業推進について】

今後は、イオルの箇所数を増やすのと同時並行しながら狩猟漁労、採集文化の総体像を見据えながらネットワーク機能の充実を図り、それぞれの地域における経験の情報交換と共有化を図ること、それらの蓄積を再度、イオルでの文化実践に結びつけ＜文化実践者の具体的な要求を聴取＞することなどにより、イオル事業の今後の取り組み方法、「イオルのあり方」や「ネットワークのあり方」を構築していくべきであるとされました。

アイヌ文化の振興は、損なわれた文化の発掘や開発で破壊された環境の再生などにも波及する未経験の領域への取り組みであるとともに、アイヌ・和人、地域行政、国が一丸となって取り組むべき価値のある事業であり、是非とも広大な規模で、息長く、実施して欲しいと希望が出されております。

また、アイヌ文化の伝承推進のため、すべての関係者から喫緊の課題とされる「素材の確保」については、白老町で先行実施されている希少植物、樹木等の植栽とその育成や管理の研究・実践に基づいた経験の蓄積などが今後とも必要であるとされ、より一層の予算確保により、あらゆる試行や検討がなされるべきであるとされました。

＜参考＞ 例えば、狩猟、採集、料理・酒造り、舞踊、カムイノミなどの文化総体ともいわれる「イオマンテ」や「鮭の捕獲」の体験、「蝦夷風俗十二ヶ月図（平沢屏山作）」など「アイヌ絵」などで想起される暮らしぶりの追体験は、単なる知識の集積とは異なり「イオル事業」の実践ではじめて深く体得され、伝承されるものです。

◎ 地域の概要

古くからアイヌの人々が居住しており、「東蝦夷地各場所様子大概書」（1808～1811）によれば、海岸線沿いにアイロから砂臺まで5のコタンが存在し、全体で82戸、人口349人が居住していたとされている。

コタンは海浜地に所在し、海を主とした生活を行っていたが、一方ではヒエ、アワに加え他地域では見られない大角豆を栽培するなど、本格的な栽培を行っていた。

その後、安政三年には仙台藩の陣屋が設置され、明治13年には戸長役場が設置される等を経て、昭和29年の町制施行により今日の白老町となっている。

産業については、長らく農業及び漁業の第1次産業が中心（就業者の6～7割が従事）であったが、昭和30年代半ばの大昭和製紙白老工場の建設着手を契機に産業構造が変化し、現在では第3次産業が中心（就業者の6割が従事）となっている。

この産業構造の変化に伴い居住構造も変化し、人口の殆どが海岸線沿いに開発された市街地に居住している。

◎ アイヌ文化

江戸時代の場所請負制下では、請負人野口屋が白老地域を請け負っており、同地域のアイヌのほとんどは野口屋の漁場で使役させられていた。こうした和人と接触は、アイヌ文化の変容に大きく影響したものである。

明治以降、アイヌの集落が古い形を残したままであったところ、室蘭から三笠までの鉄道開通により、本州より北海道を訪れる人の増加と、それらの人々が白老に下車して、アイヌの集落を見物するようになって以後、白老のアイヌ文化が広く世に知られるようになった。その後、昭和39年まで、町内の一角に、観光地としての「アイヌコタン」が形成され、木彫製作・販売が隆盛し、古式舞踊等のアイヌ文化が紹介されていた。

昭和40年に、ポロトコタン周辺に「アイヌコタン」が移転し、さらに、昭和59年に財団法人白老民族文化伝承保存財団が設立され、それまでの観光色一辺倒の文化紹介から学術的な調査・研究の成果をも加味した文化紹介となり、現在のアイヌ民族博物館の活動に連なっている。

この過程のなかで、文化伝承は、当初、複数の血縁集団によるものから、地縁集団へと変化している。

白老におけるアイヌ文化伝承・保存は、当初の観光地としてのものから、観光と学術的な面を併せ持ったものとなり、今日に及んでいる。その特徴的なところは、文化伝承・保存活動の主体がアイヌ民族博物館にあるところから、地元白老のアイヌ文化に止まらず、広く北海道全域のアイヌ文化を総合的にとらえているところにある。なお、白老のアイヌの多くが、明治以降、漁業を生業としており、これらの人たちは文化伝承・保存に携わることは少なかった。

白老のアイヌ文化の伝承・保存の今日的様相の特徴は、別表にいくつか例をあげたが、アイヌの生活圏が山野・河川・海の三領域に及んでいるところから、これらの領域における生業と深く結びついた文化が伝承・保存されているところにある。たとえば、儀礼を見ると、山野との関わりでは、イオマンテ（飼熊の霊送り儀礼）があり、河川では、ペッカムイノミ（サク迎への儀礼）やチャサンケ（舟降ろしの儀礼）、海では、シッカマ（メカジキ）の霊送りなどがあり、特に、シッカマ（メカジキ）の霊送りは、白老のアイヌが海を生活圏としていたことを物語るものである。

なお、アイヌ民族博物館の3名の学芸員はいずれもアイヌであり、自文化の伝承・保存活動に加えて、調査・研究、さらには、民具資料の展示等に至るまで、アイヌ自らが行うという同博物館の活動は、アイヌ文化伝承・保存の将来的な姿を示しているものといえる。

◎ 地域の課題

アイヌ文化の伝承者が高齢を迎え、文化の伝承が危ぶまれている状況の中で、公益法人という特性を活かした安定的な伝承活動等が期待できる。

今後は、イオルを活用しアイヌ文化の蓄積を質量共に高め、社会教育施設と言う特性を活かし、地域ぐるみでのアイヌ文化の伝承・保存の取り組みや、他の地域との連携を図ることにより、アイヌ文化の振興に大きな役割が期待される。

◎ 地域の概要

古くから多くのアイヌの人々が居住しており、「東蝦夷地各場所様子大概書」（1808～1811）によれば、沙流川とその支流にサルフトからイケウレリまで15のコタンが存在し、全体で236戸、人口1013人が居住していたとされている。

往時のアイヌの人々は夏は漁労に従事し、冬になるとコタンに帰っていた様である。

明治5年には仙台藩士が入植、明治32年には戸長役場が設置される等を経て、昭和29年の町制施行により今日の平取町となっている。

産業については、クロム鉱山が生産を行っていた時期（大正6年～昭和33年）はあるが、長らく第1次産業が中心であり、大正期から昭和50年代にかけては水稻耕作、現在はトマトのハウス栽培が基幹産業となっている。また、町内の7割を占める山林を背景に、林業についても規模を縮小しながらも続いている。

この様な産業構造から、平取町本町地区に一応の中心市街地は形成されてはいるが、人口の大半はかつて存在したコタンと同地域に集落を形成して居住している。

◎ アイヌ文化

江戸時代の場所請負制下では、平取地域にある集落は、直接に請負人の影響下ではなく、春から秋までの漁期、沙流川河口及びその周辺の海浜での漁場労働に使役され、冬期間は、本来の集落にもどり、軽物出産等に従事していた。したがって、和人との接触は、漁場労働の期間中であり、恒常的に影響を受けることがなかったこと、明治以降も、農林業に従事する者が多く、和人の影響が少なかったことなどから、古い形の文化が比較的遅くまで残っていたものと思われる。

その一例がアイヌ語である。平取地域では、古くからアイヌ語並びに口承文芸が伝承されてきており、特に、アイヌ語はネイティブスピーカーが近年まで健在であったことから、音声及び活字によるアイヌ語並びに口承文芸は数多く世に紹介されてきた。現在もなお、口承文芸の話者は複数健在である。平取地域のアイヌ文化伝承・保存は、この言語を中心として行われてきたものであり、特に、文化伝承・保存を目的とした活動としてではなく、日常の生活の営みとともに現在に至っているものである。

また、平取地域は、周辺の山野にオヒョウ、シナ等が豊富であることから、江戸時代よりこれらの素材を用いた産品（アットゥシ、同反物等）の製作が盛んであり、戦後の北海道観光ブームにおいても、それらの製作が盛んに行われた。さらに、男性の木彫も盛んで、特に、「盆」に施される文様は、この地域独特のものである。近年、木彫販売が衰退するなかにおいて、現在もなお伝統の固守と新たな創造の両面をもって木彫製作に取り組んでいるアイヌが複数いる。こうしたものづくりは、アイヌの有形文化の伝承・保存に大きく寄与しているものである。

平取地域のアイヌ文化の伝承・保存の今日的様相の特徴は、上述に加えて、別表にいくつか例をあげたが、アイヌの生活圏が主として、山野・河川流域の二領域であるところから、これらの領域における生業と深く結びついた文化が伝承・保存されているところにある。たとえば、儀礼を見ると、山野との関わりでは、イオマンテ（飼熊の霊送り儀礼）があり、河川では、チナサンケ（舟降ろしの儀礼）などがあり、白老地域と同じ様相を呈しているが、儀礼の内容・次第（記述を略す）は地域独自のものがある。

平取地域、特に二風谷地区に居住するアイヌは、古くから血縁集団を構成しており、上述したように、アイヌ文化の伝承・保存は、それを目的とした活動としてではなく、日常の生活の営みとともにあり、この血縁集団及び同集団が集合した形で行われている。

◎ 地域の課題

平取地域については、日常生活の中でアイヌ文化が伝承・保存されて来たことから、多くの伝承者を有しているが、その大部分の方が高齢を迎えており、加えて社会経済情勢の変化により、次代のアイヌ文化の担い手である若年層が、都心部へ流出していることなどから、文化伝承は危機に瀕しており、伝承環境の整備が喫緊の課題となっている。

資料5-3 地域の特性（地域基礎データ）

項目	白老地域	平取地域	備考
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道南西部 ・平野部と内陸山岳 ・海岸線に沿い市街地を形成 ・山岳地帯の大部分は支笏・洞爺国立公園に属する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道中央南西部 ・日高山脈支脈から沙流川下流域 ・丘陵地帯と河岸段丘 ・沙流川及び支流域に多くの集落が存在 ・重要文化的景観選定（予定） 	各町からの聞き取りによる。
面積	42,575ha（100.0%）	74,316ha（100.0%）	各町からの聞き取りによる。
山林	31,561ha（74.1%）	60,995ha（82.1%）	
国有林	22,621ha（53.1%）	41,881ha（56.4%）	
町有林	737ha（1.7%）	3,820ha（5.1%）	
民有林	8,203ha（19.3%）	15,294ha（20.6%）	
原野	2,747ha（6.5%）	2,920ha（3.9%）	
農地（田畑等）	2,302ha（5.4%）	4,939ha（6.7%）	
宅地	979ha（2.3%）	289ha（0.4%）	
雑種地	639ha（1.5%）	531ha（0.7%）	
池沼	525ha（1.2%）	10ha（—）	
その他	3,822ha（9.0%）	4,632ha（6.2%）	
人口	20,647人	6,021人	H19.4.1位基台帳
アイヌ人口	約2,500人（町人口の12%）	1,400人（町人口の23%）	推計値
協会会員数	309世帯	251世帯	（社）北海道ウタリ協会
支部会員数	309世帯	261世帯	
居住地域	海岸沿いに開発された市街地に居住	かつてのコタンの所在地に居住	
産業別就業者数	8,772人（町人口の42.5%）	3,225人（町人口の53.8%）	H17国勢調査 ※白老町については、左記の外に分類不能6%が存在する。
第1次産業	654人（就業者の7.5%）	1,124人（就業者の34.9%）	
第2次産業	2,785人（"31.7%）	565人（"17.5%）	
第3次産業	5,281人（"60.2%）	1,536人（"47.6%）	

項 目		白 老 地 域	平 取 地 域	備 考
地 形 概 要		全体にやや急な地形に占められている。丘陵地域と山地帯の二つが隣接し、丘陵部の面積が多い。急な斜面は丘陵部では沢に面して崖状に続く。平坦から緩斜面の傾斜の緩い丘陵地帯では、谷間の平坦面が長く続く。西側では火砕流が堆積したままの緩斜面が多く残されている。また、山地帯では北西の山地帯下部に溶岩流起源の緩斜面が出現する。	全体的にはやや急な斜面で構成されている。しかし標高差が大きく谷の奥行きがあり、深いV字谷の地形を作る。急斜面に分類される面積が他の地域に比べて大きい。緩斜面は少なく、川沿いの段丘面か、山地中腹の地滑り性のものである。	平成16年度 アイヌの伝承 活動に必要な 自然素材の現 存量等の調査 業務報告書： （財）アイヌ 文化振興・研 究推進機構
植 生 概 要		主要な植生は山地広葉樹林である。里ではクリを含むミズナラ林が分布し、山地では針葉樹林を少し交え、多様な広葉樹が混成する広葉樹林が分布する。沢には細長く溪畔林が続いている。	山地広葉樹林が主要であるが、針広混交林も多い。いずれも緩～やや急な斜面があれば植林地として利用されている。 沢筋には溪畔林のカツラ、ハルニレが多く見られる。	
文化 特性	信仰・儀礼等	山・海の文化領域	山の文化領域	平成15年度 イオル再生等 アイヌ文化伝 承方策基礎調 査報告書（ア イヌ文化の地 域的様相等編） ：（財）アイヌ 文化振興・研 究推進機構
	住 居	海の文化領域	山の文化領域	
	衣 服	同一の文化領域		
	芸 能	山・海の文化領域	山の文化領域	
	言語・口承文芸	同一の文化領域		
アイヌ文化関係施設		（財）アイヌ民族博物館 町立仙台藩元陣屋資料館 白老コミュニティセンター	町立二風谷アイヌ博物館 萱野茂 二風谷アイヌ資料館 沙流川歴史館 北海道大学文学部二風谷研究室 （旧マンロー邸：有形文化財建造物） 平取町民芸品共同作業所	
活 動 団 体		（社）北海道ウタリ協会白老支部 白老民族芸能保存会（会員数50人） アイヌ民族博物館（職員数45人） テケカッペ（会員数20人） フッチコラチ（会員数20人） 森竹竹市研究会（会員数15人） ポロトの母さんの会（会員数15人） シッカブ研究会（会員数15人） 白老商業協同組合	（社）北海道ウタリ協会平取支部 平取アイヌ文化保存会（会員数72人） アイヌ語教室（会員数65人） 二風谷観光振興組合（会員数33人） 企業組合二風谷民芸（会員数15人）	

項 目	白 老 地 域	平 取 地 域	備 考
文化の伝承・保存	教育型	生活密着型	
環 境	○博物館を中心にアイヌ文化を温存 ・国内有数のアイヌ資料を収蔵 ・アイヌ民族の自らの調査研究 ・アイヌの歴史、文化を情報発信	○生活に根ざしたアイヌ文化を温存 ・自然に関わりの深い産業に従事 ・自然への距離が短い地域に居住 ・血縁、地縁を中心とした伝承	
形 態	○博物館が学術的蓄積を活用し伝承者を育成 ・博物館運営上必要な技能の伝承 ・学術的な調査研究としての伝承 ・社会教育施設の教育としての伝承	○血縁、地縁関係の営みの中で文化を伝承 ・血縁（親子等）：生活 ・地縁（地域）：各種行事 ・地縁（職業団体）職としての伝承	
分 野	・舞踊・音楽、衣服、工芸、食の順 ・博物館が中心となっていることから、運営上に直接寄与する分野が中心。	・工芸、舞踊・音楽、言語・口承文芸、衣服の順 ・職業としての工芸や、言語・口承文芸などの外、生業、植物利用、生活文化など、生活に根ざした文化が中心。	
伝 承 実 践 者 数	108人（アイヌ人口の4.3%）	84人（アイヌ人口の6.0%）	平成15年度イオル再生等アイヌ文化伝承方策基礎調査報告書（アイヌ文化の地域的様相等編）：（財）アイヌ文化振興・研究推進機構
言語・口承文芸	3人（伝承者の2.8%）	11人（伝承者の13.1%）	
儀式・風俗	6人（" 5.6%）	5人（" 6.0%）	
信 仰 観	2人（" 1.9%）	3人（" 3.6%）	
衣 服	19人（" 17.6%）	10人（" 11.9%）	
食	14人（" 13.0%）	7人（" 8.3%）	
住	1人（" 1.0%）	7人（" 8.3%）	
舞 踊 ・ 音 楽	45人（" 41.2%）	15人（" 17.9%）	
工 芸	17人（" 15.7%）	18人（" 21.4%）	
生 業	—	2人（" 2.4%）	
植 物 利 用	—	2人（" 2.4%）	
習 慣 ・ 知 識	1人（" 1.0%）	3人（" 3.6%）	
生 活 文 化	—	1人（" 1.2%）	

第二章 ネットワークの検討結果を踏まえた今後の事業展開

1 各イオルの目指す姿

第一章における検討結果を踏まえ、地域特性を活かしたそれぞれのイオルの目指す姿について、資料6のとおり取りまとめた。

それぞれの地域が地域の特性を活かした事業を展開するとともに、お互いの地域が機能を分担しあい、連携することにより事業の一層の効果的で効率的な展開が期待できる。

各イオルの目指す姿の概要については次のとおり。

(1) 白老イオル

白老地域については、アイヌ民族博物館、自然素材標本林、ポロト自然休養林等のアイヌ文化を学習・体験できる施設等がポロト湖畔周辺に集積している。

この立地条件を活かし、ポロト湖畔周辺を植栽空間や自然素材採取空間と結ぶ核とするほか、各種事業や活動拠点となる空間としても位置付けて、これまで白老地域が培ってきたアイヌ文化に関する知識や経験とあわせて、実践的活動を通じた伝承者の育成や、アイヌ文化の体験を通じた普及啓発活動を行う「教育型イオル」を指向する。

(2) 平取イオル

平取地域については、沙流川流域の豊かな自然の中で、多くのアイヌの人々が生活に密着した伝統文化活動を行っている。

こうした活動を支援するため、広大なイオル空間を設定し、自然素材の採取の場となるイオル型複層林の再生や生活文化の中心であったコタンの再生などを行い、即時利用が可能な自然素材を活用した活動の深化を目指す「活動型イオル」を指向する。

資料6 白老地域と平取地域の目指す姿と具体的取り組み

項目	白老地域	平取地域
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> ・教育型イオル ・自然空間において地域のアイヌの人々が中心となって活動を実施 ・ポロト湖畔周辺空間において博物館と連携を図り、伝承活動や体験交流事業を実施 ・植栽物とともに、将来に向かってアイヌ文化を護り継ぐ 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動型イオル ・既存の自然空間を活用し、地域のアイヌの人々が中心となって活動を実施 ・自然素材の持続的な採取等を可能とするイオル型複層林の確立 ・イオルの森と拠点になるコタンで伝承活動の実践、研究と交流活動の実施
空間形成	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ文化を伝承・体験できる教育空間 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活に密着した広範で実用的、速効的な活動空間
空間の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・ポロト湖畔を中心に植栽地区3ヶ所、試験栽培地区2ヶ所、自然素材採取地区7ヶ所を設定。 	<ul style="list-style-type: none"> ・沙流川と川筋に広がる森林をイオルの森として設定。 ・「自然」、「採集」、「事象等保存」、「生活再現」、「施設」の5つのエリアを設定。
植栽	<ul style="list-style-type: none"> ・将来的な採取等の活動空間の形成。 ・樹木の保育管理を通じた文化の保存。 ・アイヌ文化を理解する標本林の整備。 	<ul style="list-style-type: none"> ・採取活動後の補植。 ・有用植物確保のための植栽と人工的保育管理。 ・活動の場（イオル型複層林）形成のための採取と植栽。
試験栽培	<ul style="list-style-type: none"> ・樹木、薬草、穀物の試験栽培及び活用 ・自然素材の栽培方法の確立。 ・栽培も含めた自然素材の安定的確保。 ・栽培した苗を活用した採取と植栽の循環に向けた取り組み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イオル型複層林の形成に向けた苗木等の栽培。 ・有用植物栽培適地確保のための試験栽培。 ・イオル型複層林形成に向けた天然更新システム確立のための試験。
空間整備	<ul style="list-style-type: none"> ・ポロト湖畔におけるコタンの復元等 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の拠点となるコタンの復元 ・5つのエリア機能の充実
調査研究	<ul style="list-style-type: none"> ・拠点空間（ポロト湖畔）の整備に向けた調査検討 ・自然素材供給ゾーンの自然素材の現存量の把握と採取にあたってのルール等の策定。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ文化の伝承に必要な自然素材の現況調査 ・自然素材に由来する空間内のアイヌ語地名の調査 ・自然素材に由来する地名の保全と再生
空間活用	<ul style="list-style-type: none"> ・ポロト湖畔をはじめとしたイオルの森における自然素材を活用した伝承活動や体験交流事業 	<ul style="list-style-type: none"> ・イオルの森とコタンにおける文化活動の実践、研究と体験交流活動の実施
伝承活動	<ul style="list-style-type: none"> ・イオル型文化伝承に向けた調査検討 ・アイヌの伝統文化ライブラリーの構築 ・空間とライブラリーを活用した実践的伝承活動 ・後継伝承者の育成 ・自然空間の再生に関連する儀式・儀礼の伝承 	<ul style="list-style-type: none"> ・チセの建設や生活用具の複製を通じた伝承活動 ・情報提供等による地域の自主的活動の支援 ・伝承活動の体系的な整理と自然素材の把握 ・伝承者の生涯に必要な自然素材の量の把握 ・後継伝承者の育成 ・自然空間の再生に関連する儀式・儀礼の伝承
体験交流活動	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌの人々が中心となった実施体制を構築するため関係機関による協議会を設置 ・体験交流プログラム構築のための検討 ・空間とライブラリーを活用した体験交流事業の試行的実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践的伝承活動を通じた体験交流事業の実施 ・アイヌの人々の持つ独特な精神文化等に触れるツーリズムの実施
空間の管理運営	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌの人々が中心の管理運営体制の構築 ・拠点空間（ポロト湖畔）の管理運営 ・植栽及び試験栽培地の保育管理 ・自然素材採取地区の管理（活用管理） 	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌの人々が中心の管理運営体制の構築 ・アイヌの人々を中心とする活動拠点（コタン）の管理運営 ・イオル型の複層林の育成と保育管理 ・採取地区の管理
ネットワーク事業	<ul style="list-style-type: none"> ・情報交換、人材交流、自然素材融通等の連携 ・事業実施地域外への情報提供 ・周辺地域の核となる事業の展開 	
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・イオル事業の充実を図るための各種取り組みの実施 ・他の事業、他機関との連動、連携によるイオルの機能充実 	
規制緩和等	<ul style="list-style-type: none"> ・規制緩和、特区構想等に関する調査研究 	
財団事業の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ文化フェスティバル、アイヌ語上級講座・親と子講座等の活用など財団の既存事業の活用 ・既存事業の見直しによるイオル事業との連携強化 	

2 事業の推進体制

アイヌ文化振興財団は事業主体として、それぞれの地域の意向を踏まえて事業の推進に努めるものとする。

また、各事業実施地域においては、アイヌの人々を中心に、行政機関等の関係機関（団体）からなる協議会を設置し、事業に対する地元意向の取りまとめや、実施にあたっての各種調整など、必要となる協力を行うものとする。

3 事業の展開

（1）事業期間

空間の形成や空間を活用した各種活動が軌道に乗るまでに時間を要することを考慮し、当面平成22年度を目標年次とし、各地域の空間形成と活用に向けた取り組みを行うとともに、地域間の連携促進（ネットワーク形成）のための事業を実施し、ネットワーク形成のモデルケースとする。

（2）主な事業の概要

① 白老イオル

- ・博物館を中心としたアイヌの伝統文化のライブラリーの構築
- ・ポロト湖畔におけるコタンの復元等
- ・空間とライブラリーを活用した実践的な文化伝承活動
- ・地元関係機関が中心となった空間等を活用した体験交流事業の試行的実施
- ・長期間にわたる植栽物の管理を通じたアイヌの伝統文化の伝承・保存

② 平取イオル

- ・沙流川流域の広大な山林をイオルの森として設定
- ・継続的な活動を支える自然素材の採取を持続的に可能とするイオル型複層林の整備
- ・活動拠点となるコタンをイメージした空間の形成
- ・コタンを中心にイオルの森を活用した伝承活動の実践と交流活動の実施

③ 連携促進のための取り組み

- ・伝承者を始めとする人材の交流
- ・自然素材の融通による過不足の解消
- ・アイヌの伝統ライブラリーの協同構築と共有
- ・情報交換等を行う連携促進会議の設置

（3）事業の実施スケジュール

各年次において想定される取り組みについて、参考資料のとおり取りまとめた。

なお、具体的な取り組み内容については、諮問委員会及び施策推進会議において、各年度の事業実施計画として定められるものである。

4 イオル再生事業実施要望地域に対する対応についての考え方

(1) 情報の提供等

事業期間において、白老、平取両地域の事業の実施状況等について、他の地域に対し積極的に情報提供を行うとともに、地域事情の把握や、イオル再生事業に関する理解の促進と共通認識の形成に努めるものとする。

(2) 自然素材の供給

他の地域において所要の自然素材に不足を生じ、事業実施地域に余剰を生じている場合は、事業に支障を来さない範囲で供給要請に対して対応に努めるものとする。

(3) 他地域からの事業への参画

事業実施に際し、他地域の知識や経験の活用や、人材の協力を得ることが事業実施にあたって効果効率的な場合は、積極的に参画を求めることとする。

(4) 弾力的対応

事業期間内であっても、緊急的な事業の実施を要する場合、事業の執行上効率的な場合等については、地域事情等を検討し弾力的に対応することとする。

5 事業の検証と評価

本展開方針の事業の最終年度である平成22年度中に、ネットワークの形成も含めた事業の検証及び評価を行い、アイヌの人々の意向を尊重しつつ、次期イオル再生候補地の特性などを踏まえ、平成23年度以降の本格実施に向けての検討を行い次期展開方針を作成する。

〈参考資料〉 事業実施スケジュール

項 目	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
白老地域					
○推進体制					→
○空間の形成					
・植栽		→			→
・試験栽培					→
・空間の整備					→
・調査検討		→			
○空間の活用					
・伝承活動					→
・体験交流活動					→
○空間の管理運営					→
平取地域					
○推進体制			→		→
○空間の形成					
・植栽			→	→	→
・試験栽培			→	→	→
・空間の整備			→	→	→
・調査検討			→	→	→
○空間の活用					
・伝承活動			→	→	→
・体験交流活動			→	→	→
○空間の管理運営			→	→	→
共通事項					
・ネットワークの検討					→
・規制緩和等					→
・財団事業の活用					→